

メディア時評



「平成の鬼平」「一番首相にしたい人」とかつて言われた元日弁連会長の中坊公平さんが5月3日に亡くなった。同日6日付朝刊は、毎日、朝日面紙が1面で報じ、社会面に関連記事、読売は社会面のみ。これらの記事を読むにつけ、よみがえる中坊さんの言葉がある。「忍辱にんじゆの生活」

中坊さんは国に請われて引き受けた任専の債権取り立てで足をすくわれた。社長を引退したのちに部下の弁護士の強引な取り立てが表面化し、2003年、責任を取って弁護士を廃業した。「はじめをつけることを命にしてくれたのだから、散るときも潔く」と断腸の思いを記者会見で語った。当時、「辱めを忍ぶと書いて忍辱にんじゆというのだが、人の（同情の）一言も身に突き刺さり、あまりに冷たい」とも漏らした。

私にとっての中坊さんは、全国最悪の産廃不法投棄の島、香川県・豊島の住民の闘いを率いた弁護士である。鬼平と持ち上げられる前から島民に寄り添う姿を見てきた。国民主権の実践と現場主義、「私たち」と訴える一人称の弁護士だった。権力相手の弱者の闘いに記者の私も半ば同志であった。

中坊さんの「忍辱の10年」伝えず

曾根 英二さん 阪南大教授（マスコミ論）

08年、末期がん治療中だったキヤスターの故筑紫哲也さんは「鬼平待望論をみんながどれだけやったか。『バブルの退治を』と持ち上げて、降ろすときもフットボール。これはメディア論ですよ」と、大学の自らの講座に中坊さんを招いた。「国民のための仕事をしたのに、弁護士を廃業された。理不尽では」と問う筑紫さんに、「指揮官どこにあるか。艦橋に立つ。直轄の所で事故が起ければ弾が当たったと同じ」と中坊さんは答えた。筑紫さんは、私に「（任専での問題は）中坊さんを絶対否定するような話ではない」と話したが、多くのマスコミは「忍辱の10年」の日々を伝えてこなかった。それも、「あの場所（弁護士事務所）へ（再び）行きたい」という中坊さんの夢は断られた。にもかかわらず、各紙の訃報には「不適切な取り立てで」「光と影」とだけ、さりとあった。

メディアはかつての鬼平にあまりに冷たくなかったか。唯一、毎日社会面の「評伝」は忍辱にんじゆに触れ、苦悶した中坊さんに寄り添っているように思えた。

（大阪本社発行紙面を基に論評）

◆ ◆ ◆
 かね・えいじ 1949年兵庫県生まれ。早稲田大卒。山陽放送記者、JNNカイロ特派員などを経て現職。「限界集落」で毎日出版文化賞。他に「コミが降る島」など。